

山鹿素行の学問史観

—日本の学問史を中心に—

内 山 宗 昭

On the Soko Yamaga's Thought of History of Education

Muneaki Uchiyama

(序)

山鹿素行(1622~1685)の教育・学問観の形成上の基礎論に学問史論の展開があった。拙稿「山鹿素行の教育観の形成——四教一致から古学への転回を中心に——」¹⁾で指摘したように、素行が体系化する武家故実の内容に日本の学事に対する歴史的な知識があり、史的に学問・教育をとらえる視点を加えて教学論を説述している。素行の学問史論は具体的に日本の教育・学問を詳論しており、関連する記述も多く見い出すことが出来る。

本稿では、近世前期における学問史論²⁾として、素行の論が如何なる特質を持つかを中心に考察を進めながら、彼の教育論の基礎論の性格である史的認識・歴史意識の意義を検討したい。はじめに素行の学問史論の思想史的な位置を近世の学問史論を振り返りながら確認し、それを踏まえて、素行の論の具体的な記述内容について考察をする。

1. 儒学による日本学問史論の概観と素行

明治10年の『日本教育史略』の下地となる学問史に関する著作として、松下見林『学原』、那波魯堂『学問源流』、伊地知季安『漢学起源』があげられており、遡れば凝然、虎関師連による仏教教学史が教育史的研究の先蹤とされるが³⁾、ここでは儒家による近世史学の興隆以降の学問史観について、概観して若干の考察をしたい。

『学原』、『学問源流』また中村惕斎『本朝学制考』などは、学問史の記述のみを意図した著作であるが、多くは著作中の学問論の中で部分的に、儒学の意義さらに自説の正当性の主張のための例証として記述される。また儒学者の日本学問史は多く中国学問史の記述を紹介した上で、それとの比較という論旨で現れてくるのが通例である。

伊藤東涯の『古今学変』のように中国学問史の記述に終始するものが多いが、儒学者は学問の系統・学派を問題にする関心から中国学問史をとりあげ、その歴史意識を援用しながら、儒学の日本化の意図の点から日本の学問史を対照するのである。基本的にはそれを朱子学の「史論」の領域での日本化と見る事が可能と思われる。

近世初期藤原惺窩、林羅山において史学が文芸的性格より実証的な方向へ転回する中で⁴⁾、儒学に内包する史学的関心が幕藩体制確立期を通じた徳川家臣団の為政者としての歴史意識と相応して修史事業、歴史書の成立を促す⁵⁾。経学に示された倫理を史学により叙述するという関心から、以降『資治通鑑綱目』の史論が固定化する⁶⁾。

『惺窩先生文集』には日本が古代に中国と抗衡しえた理由に大学寮に諸儒が在って試料の制と積奠の礼が行われていたことをあげている⁷⁾。儒者の学問史論の起点は儒学による奈良・平安期の学校制度を評価する点で一致している。儒学伝来以降、学問・教育が興隆し、その後衰退して、長い空白の後、徳川の治世下において治世確立に対応して再び文運を復興するべきであるという見解が大半である。近世前期に学問史としてこの見解を叙述し、論を加えたのが素行であり、山崎闇斎、熊沢蕃山であった。

公的には幕府の命により林羅山及び鷲峰による『本朝通鑑』の編纂があった。正編続編合わせて278巻が寛文10年(1670)の夏に完成している⁸⁾。本書は編年体を採用しており、学問史の主題に即した記述は提示されないが、「本朝通鑑凡例」の一箇条に「学校興廃並儒家博覧文芸詩才可取者載之」⁹⁾とあり、学問史記述の編纂意図を窺える。素行らはこの動向に関心を持ち¹⁰⁾、また『本朝通鑑』とは独自の史書を意識し、教学の必要論を基礎に倫理的評価を加えた学問史論を展開するに至っている¹¹⁾。

闇斎は『大和小学』で、次のように記している。

我国第十六代応神天皇の御宇に百済国より阿直岐といふものしり来りしに、天皇汝にまされるものありやとひとたまへば、王仁といふ者ありとこたふ。すなわち是をめし給へば、かの国より王仁を来し経史をたてまつる。太子以下みなまなびならへり。是日本経学のはじめなりと申伝る。第四十二代文武天皇の御宇に積奠をはじめ給ひ、延喜・天暦の比まで六十余州に学校あり。大学寮には二件の積奠をこなはれ、孝経・論語などを氣にめぐりて講じ侍り、明日酢を御門に奉る。奠儀は延喜式、江次第にあり。本朝文粹に講書の文をのせたり。年中行事積奠の歌に、唐人のかしこきかけをうつしとめてひしりの時とけふまつるなり。献酢歌に、まつりせし八月のみけをとりわきて君にそなふるけふのひぼろき。かく目出たかりしに、いつの時よりすたれけるぞや。源氏の奨学院、藤氏の勸学院、橘氏の学館院など、その名

をしるものもまれなり。下総の足利も僧法師すみけるとぞ。近比我相模の金沢にいたり文庫のあとを尋しに、昔のいしずゑもなくなり、わづか残れる書は弥勒堂に入をきぬとて見せ侍る。かなしきありさま也¹³⁾。

ここでは学問の衰微に対して、その要因を問うことは行なっていないが、素行、蕃山では、①仏教的学風への移行による弊害、②詩文の隆盛による教学の道徳的性格の欠如、③戦国動乱による教育・学問の制度的荒廃をあげている¹³⁾。素行、蕃山、闇斎の学問史記述を比較してみると、素行が量的にまた史論の意図の明確さにおいて際立っていると言える¹⁴⁾。素行の古学の基礎的な思想性格に朱子学的な主知主義が存在している点で史学的見地が明確であると言うのみならず、武教知識の体系化を試みる素行思想の特質と教育・学問の方法論的な強い関心によって、史的論述の部分で陽明学派および朱子学派自体に優っていたと考えられる。

素行、蕃山、貝原益軒などに共通していたのは、素行の場合の『中朝事実』に代表されるような『日本書紀』の教学論による解釈である。蕃山は『日本書紀』から①天地を師とする、②神器を師とする、③書を師とする、三期の時代区分を行なっている¹⁵⁾。古代の学問史に関して経書伝来以前に教学が存在していたと解釈し、日本の文化的素地を高く評価するという見解である。益軒にも現われる見解であるが¹⁶⁾、素行の『中朝事実』はこの先駆である¹⁷⁾。日本の教学の源を政教一致観に立って儒家神道により解釈するものである。こうした点で、素行もその「日本中朝主義」などに典型的に主観的な歴史観と記述が見られるが、歴史の素材の扱い方には客観性が評価されており¹⁸⁾、本稿で取り上げる学問史論はその点が確認できる。その客観的記述の成果は評価できるものの、近世後期の、国学あるいは考証史学に基づくものとは性格を異にし、史学史上、幕藩体制確立期での典型に素行の論は位置するといえ、学問史の記述自体よりも、それを包括した論全体の主張である教育論なり、歴史論なりに意図の中心がある。

これに対して中村惕斎『本朝学制考』、松下見林『学原』は、前期の中でも純粹の学問史書という意味で特筆される。『本朝学制考』は成立年が不明であり、『姫鑑』などのように寛文年間の教育論として素行に対比出来るのか、時代的に下るものなのか検討が必要とされる。本書は「学校ノ由来」「学官学識」「積奠ノ由来」「新学ノ名目一学院・院頭・寮首・賓客」の各項からなり、学校・積奠の制度に史的省察を加え、学校制度の確立を説いたものである。以下記述の概要を整理してみると、天皇名による時代区分に沿って記述しながら、学校の由来については、次のように取り上げられている。

①儒学の始め：阿直岐・王仁来朝と『論語』の献呈，菟道太子・大鷦鷯の就学（応神天皇期）。五経博士来朝，王辰爾王柳貴日本最初の博士等，教育・学問の存在の確認（欽明天皇期）。

②大学寮：浄見原都時に大学寮の名を見出せるとする（文武天皇期）。平安京の地図より朱雀門の東二条の南にあり二町四方であったとする（桓武天皇期）。

③国学：諸国の国学設立は吉備真備の大宰府学設立より始まると推測している（考兼天皇期）。足利学校は小野篁が関東国司であったときの遺構であるとする（淳和・仁明天皇期頃）。諸国に国学が各々存在していたとみている（清和天皇期以前より）。

④私学：藤原冬嗣の設立した勸学院は藤原氏の私学として近衛家が別当を代々ついで来たとする（嵯峨天皇期弘仁年間）。在原行平設立の奨学院は源氏が別当を与かるとする。公学と私学の意味区分を行なっている。

その学官と職制は、

①大学寮の官職：大学頭助は奉行・祭主・監督官を職掌とし，行政官として学外にいたとする。

②教員：博士・助教・直講の分掌。文章博士は紀伝道の師として三史文選詩文を，明経博士は十三経を，音博士は経史の音訓を，書博士は書法を，明法博士は律令格式を，算博士は天文曆数算術を教授したと記す。

③国学：各博士助教があつて在所の士民を教えたとする。

④学生・令：大学寮の学生が官人子弟という点と貢举また試験方法について。学令・考課令について。

のように取り上げられている。釈奠の項の後，最後の項は，学校案提起に際して歴史上の名称の考察を行なっている。「学校」は公的学校を想起するので，「学院」「学館」が私学に相応しい，あるいは教員は「院頭」を上位とし「寮首」がそれを助けるとしながら，「学頭」「寮頭」等，大学寮，勸学院，禅堂教育等の中で使われた名称との区別を説いている。学問史を省察した上で新たな学校案に適切な意義を持つ名称を考量するものであり，史学としての論証が評価される¹⁹⁾。

史家としても評価の高い松下見林の『学原』は『本朝学原』とも称し，音韻史を含んだ学問史書である²⁰⁾。本書は序文及び六章から成り，漢学の渡来と盛衰・漢音呉音の由来・倭訓の起りと仮名の制作・詩賦の歴史・学派・王朝時代の学校・釈奠の礼を内容とする。

三韓文献都帰本朝。凡諸博士依番上下講明經学。……由是儒教生焉。及至天智天皇之受命恢開帝業功光宇宙以為調風化俗。莫尚於文。潤德敦行，無先於学。於是建

庠序徴茂才，定五礼興百度。……

十五年秋八月丁卯百濟阿直岐来朝。十六年春二月依岐之言徴王仁，時携論語千字文来。……応神天皇太子菟道稚郎子師之習諸典籍莫不通達。此漢音之濫觴也²¹⁾。

全体に「今也鍾四海無事之化，吾儕対螢雪，於是欲知学之所由来古人之有功於後学，遂訪於旧史，記其万一云」²²⁾との意図に支えられて，「学原」の名辭に相應した学事の源を探るといふ学問的興味によって書かれている事が分かる。本書は記述全般に要旨を連ねた感があり詳細を欠く憾みがあるが，真野時繩はそれに解説を加えて『本朝学原浪華鈔』としてまとめ，出典・人名など詳細に説明した上で，文化史的側面から学事をとらえている。大学寮の盛衰，私学，別曹，勸学田，国学，学生，釈奠の事情・意義・作法，庭訓往来，金沢文庫，談義，藤原惺窩に亘って取り上げている²³⁾。

学問的興味に支えられた学問史は近世中期以降の傾向であり，前三著はその点先鞭をつけている感がある。伊藤東涯の『制度通』では思想性は背後に隠れ，研究書的な趣がある。本書は図解付記が特色で「本朝釈奠先聖先師九哲図」「本朝大学教官図」「本朝四道図」が添えてある。「釈奠の事」「経籍の事」「学校の事」の主題について制度史の観点で追っている²⁴⁾。

中期には荷田春満，村田春海等国学者の学問史論が出てくる。春海の『和学大概』は，「和学」が儒学と分化せずに存在した時代，弘仁・承和の宮中での「日本記」の講義，大江匡房の「和学得業生問答」，乱世の学問全体の衰退，「和学」再興の功労者一条兼良，近世に入つての「和学」の隆盛，林家塾での和学科，を取り上げて，以下「和学」研究の要点と書目をあげている²⁵⁾。

中期以降は近世に入つてからの学問史の動向も拾い，学派が互いに競合する中では，学派とその系統について論じる事が関心事となっている。寛政にかけての松宮観山，中井竹山，那波魯堂の記述はこれをよく示したものである²⁶⁾。西山拙斎の師である魯堂の『学問源流』になると，延喜・天曆の詩文中心の公家の学問，建武・元弘の学問の衰微，戦乱の間の禅僧の学問，藤原惺窩，石川丈山，山崎闇斎，伊藤仁斎，中江藤樹，荻生徂徠，仁斎学派・徂徠学派の情勢と学問内容の批判が見られる²⁷⁾。見林の『学原』が学問の源を探求して上古に関心を持したのに対して，近時の学派の状況に重点が置かれている。

近世後期に至ると，近藤正斎，伊地知季安，青山延光などによる本格的研究が現われる²⁸⁾。書物奉行正斎の『右文故事』『好書故事』は研究報告の体があり，史料学的な関心によって実証主義的である²⁹⁾。考証学派の薩藩の史家季安の『漢学紀原』は，中国における儒学の本質，日本への経籍の渡来，三韓隋唐の影響，奈良期以来の建学，

僧侶の教化活動，博士儒僧の輩出，新註・古註，宋学，五山僧徒より桂庵に至る学問系統を述べている³⁰⁾。彰考館教授頭取延光の『学校興廃考』も学校制度史として評価される。主題別に史的研究を行なった延光の水戸史学の業績の一端と考えられる³¹⁾。

2. 素行の学問史論の特質

『山鹿語類』『君道』篇中には，君主の治政に資する「実学」を提供することを目的とする立場から，大学寮や天皇の学問，武将の学問について論じられている³²⁾。この記述の部分は特に中国の記述と合せ，それに対応する日本の学史史を素行が史書より拾いあげたものであり，近世前期の教育史論の試みとして評価される。

本朝の古は大学寮を立てて春秋の積奠不怠，天子亦自ら是に行幸ありし也。文章博士，明経博士を置く，是れ天子の侍読をつとむ。

事実史としてのとらえ方というよりも，学事に教化の面から関わるべしとする素行の，関わった事実があったのだと論ずる主観的な主張が骨子となっているといえる。続けて，

此の文章博士と云ふは，記誦詩文を以て本とす。明経の博士は六経を宗として経書を詳にす。文章の博士は紀伝の儒者の任ずる也。然るに本朝の天子詠歌管弦を事とし玉ふゆゑにや，いつしか紀伝の儒者は登用して大臣の職をつとめ，明経の博士は時にあはずして下位下官に蟄居す。是れ則ち学問の其の宗を失ふ所也。

とある。経学を重視し，その復興を企図した素行の立論を背景に，このように大学寮の変遷が記されているが，以下君主の学問がその経世学としての意義を持ちえたかという観点からは低迷してきたと事例をあげて批判している。

順徳院の御記にも，天子第一の御事は学問也，不学則不明古道，その余力に音曲詠歌も無下にましまさぬ事を記し玉へり。いつしか帝王の詠歌管弦に長じ玉ひ，学は文詩にふけり，志は浮屠に帰依して宗廟の神徳三種の神器も形ばかり残れり。

天皇の学問事情に対して，武家の君主の学問については，

源頼朝卿天下の総追捕使に任じ，干戈を動かして凶徒を平均せしの後，大江広元，三善善信を以て政道を補佐せしむ。彼等も亦博文有識の文士にして以聖学政を佐くるにあらず。元久に中原仲章，実朝の侍読となりて孝経をよましむ。其の比は京家に往来多きによって，実朝つひに詠歌に長じ文武の備へ怠り，政道虚にして公暇がために害せらる。

其の後北条執権の間，公方必ず読書初ありき。然れども政道に心無し，泰時道に志深く貞永に式目を定めて世務を助け，時頼貞観政要を写さしめて頼嗣に献じ，清

原教隆に帝範を講ぜしむ。是れ等は皆道の恩入深重なりしかども、時に聖学を知る人なくして唯だ志を勞するまで也。……金沢実時書を好み、¹文庫を立てて黒印朱印をおさせ且つ教隆に群書治要を講ぜしめたりとにや。是れ又政道に及ぶ処なし。

源尊氏卿建武に式目を定め天下の政道をおきて玉ひしに、時の文才玄恵等に任せて撰述あり。彼等博文の俗学なるゆゑに其の所記本末前後を失へり。直義南家の儒者藤原有範に学んで自ら文王に比し、羽林相公を殷の紂王になぞらへ、つひに兄弟の戦ありて敗亡す。細川常久世務に志深くして義満を襁抱の内より輔佐せり。聖学の要道には遠けれども、義満の生質常久に輔佐せられずんば如何ぞ世を全くし玉はんや。京家の公方猶ほ以て学に志なし。

のようにある。このような事情が生じる理由として素行は総論的に次のように指摘する。

すべて政道の要をしるせる処多しといへども、教ふるに師なきがゆゑに、是れを学ぶの人も亦皆文才のみ也。尚書は古の聖賢輔佐の書也。貞観政要は唐の太宗の治徳をしるせり。群書治要は魏徵が治要を群書よりえらみ出せる書也といへども、教ふべき師のたえてなければこそ、人主是れを以て治平の助けとなし玉ふ事なし。

素行によれば日本において治政の規範となる書は「聖徳太子の憲法、淡海公不比等の律令」であるが、「類聚三代格」ではそれに相応しくない、一条兼良が足利義尚の命に応じて著わした「樵談治要」等治政の書なるものは多いけれども、治政の規範として要を得ているものは少ない。このように述べる素行は最終的に自らの主張する「聖学」を君主の学問として用いるべきであるとして、

天下の人君聖道に志なきにはあらされども、唯だ学問は書をよみ文字を習って後に知ることと思ひ、教へ奉る侍読も文字言句にのみわたり其の身の言行は少しも不正、何を以て天子武将の師範たるべきにや、人君のあやまりとまで云ひがたし。かへすがへす人君の学問は聖学に可因……、聖学と云ふは六経の経書を読む計りを云ふにあらず。聖人の心を知りて学ぶ事也。聖学にあらずしては、博文広才にして行跡よろしくとも、内外に付きて利害をさしはさみ、其の要道を可失也。

とするが、彼の史的観点というものは、詰まるところ「聖学」への帰着を引出す前提としていることが多い³⁹⁾。そこにおいては、術学への批判を軸に実質的な社会教化を論策して「聖学」と正しき「師」を持つ必要へと結論される。「聖学」を指導する「師」とは、「武士の教学」を指導出来る君主のブレンであり、素行自身の抱負と密接である。彼の「師」論と直接に関係してくる部分でもある。

同様の観点に立ちながら、教育・学問を歴史的に記述する部分が各所に現れている。

日本の記述の土台になっているのは中国の学事制度の記述である。人材を選び出す「選挙」「考試」「推挙」等について考察しているのだが、これも人材論の主張を引出すための前置きとして書かれているといえる。これと日本を比較して、人材養成と学校・教化策を論じている。

本朝の古は挙士の法行はる。異朝の例によって、式部省これを司どりて考課選叙を行ひ策試貢人学校を司どる也。令の戸令に、凡国守敦喻五教、勸務農功、部内有好学、篤道・考悌・忠信・清白・異行発聞於郷閭者、挙而進之といへり。是れ州郡において国司詳に教へて其の学文行跡ありて証拠正しきをば、必ず天子へ可奉挙とのこと也。尤も考廉の民其のきこえゆゆしきには、或は間に表し或は米帛を賜はる事記録に多し。是れ異朝の賢良方正考廉の科に類せり。国郡より挙貢のものの内、進士の科ありて試策の法尤も行はる。京に大学寮をたてて、秀才・明経・明法・算道の四等を立て人をあぐるの法、具に学令並に選叙・考課令にみえたり。然れども進士の科は皆詩賦文章に陥るゆゑに、其の弊後世まで相残りて、詠歌・郢曲・管弦等に家名を立て、詩作文章を専らとする。是れ異朝唐の比の進士の科に相類して、賢良を尋ね考廉を表する事やみぬ。本朝の風俗さながら隋・唐・宋の格也。不比等の令に出せる処、殆ど是れを以て記すに似たり³⁴⁾。

前述のように素行は近世史学史上の重要人物であり、その確立に大きな貢献をした。素行が、史料各所に教育史に関わる記事を拾い論じる必然性がある。代表的な史書である『中朝事実』『武家事紀』にも彼の教学観と歴史意識が結び付くゆえの特色を看取出来る³⁵⁾。『中朝事実』は『日本書紀』より「神」や天皇の治世にまつわる記事を、治教論、教化論の観点から評価を試みようとするものであるし、『武家事紀』は、端的に武士の教育・学問を歴史的に探った部面を有している。

北畠親房(1293—1354)に影響される中世歴史観を残しながらも近世的実証主義を確立した素行は、主観的なものと客観的なものが混在する独自の歴史観を提起しているが、史学論も交えた実証主義的な基礎論がある³⁶⁾。こうした特色が教育史の記事の背後にある点も評価しなければならない。前述した部分は特に教育を論ずる観点から記事を改めて抽出してきたところに意味があるもので、学事史としてまとめられた記述といえ、単に史料中に副次的に垣間みられるものと同一視することはできない。

以下には彼の学事史関係の記述を補足的に著作全般より求めてみる。

素行は儒学の伝来について、

応神の朝に至りて王子菟道稚郎子師阿直岐、文を学び玉ふ。阿直岐、王仁と云へる博士をすすめたてまつる。王子召之諸々の典籍を習ひ玉へり。阿直岐、王仁共に

百濟人也。此の前書籍の沙汰ありといへども、たしかに日本紀に出せる処はこれぞ経籍流布の初也。……

ここに中大兄並に大織冠鎌足連、南淵先生に従って周孔の道を学び、再び朝廷の礼を正し鞍作が乱を除せり。……これにより官位律令の制正しく文明の治さかん也。文武大宝の年、淡海公不比等奉勅、諸々の博士をあつめ撰律令、……。而して諸国に明法博士をつかはし、新令を講じ、天下の俗を一にす。其後慶雲に粟田真人入唐して本朝を君子国と称せられ、天平に下道真備入唐して唐礼百三十卷を得、故に大学の設け、积典の式、進士及第の法、あたかも中華に不異。故に舍人真道の博識、継縄・良香之記問、江帥之博聞、道長の麗藻よよ更に不乏、是れ我が道の相伝はるゆゑなり也。

儒学伝来による教育・学事の制度と普及の存在を評価して、以降仏教伝来によって日本文化の主流が変化していった点を指摘している。それでも「儒者としては異端の趣きながら」聖徳太子を評価し、仏教の流布それ自体も人心の教化に資したと述べている³⁷⁾。素行の教化論としての実効性を評価する視点がここにも現われている。

天皇の学問事情に対する前記した指摘は『武家事紀』にもある。

順徳院御記に云はく、天子諸芸能の事第一学問也。不学則不明古道、而能政致太平、貞観政要明文也。寛平遺誠、雖不窮経史、可誦習群書治要、云々。窃に按ずるに、学問を以て天子の芸能との玉ふことは此の比既に帝徳の微運なるのゆゑなるべし。既に寛平小式に、毎日巳時召侍読、次御膳也とあるときは、天子必ず師を立て道を問ひ、古の作法を詳に習熟ましまして、今日天下の政事人物の上に用ひさせ玉ふ事、延喜・天暦の古きためし也と旧紀に明也。御学問を以て芸能と申すべきことに非ず。然れども上古神聖の実義日に疎くなりて、御学問は鴻材利口のためにわたり、詠歌管弦は風流におち入りて、礼楽の実を失ふになれること也³⁸⁾。

治世に資する学問を要とする実学的見地からの時代推移の考察である。

大江広元、三善泰信については、いかに博文であり実際の政治にも貢献したものの、その学問は正しいものとはいえず、しかも君主側が彼らを使いこなせなかったゆゑに正しい政治にいたらなかったと評されている³⁹⁾。鎌倉時代についてはまた次のようにある。

古来將軍家といへども必ず手習い始めの事あり。六芸の内に書といへるは是れなるべし。源頼経関東に下向の時、元仁元年に手習始の儀あり。其の儀、南面の御簾三間を上げて御硯手本等を文台におき、陸奥守義時著布衣て参せられぬ。宰相の中將頼経のそばに候し、硯をあげ墨をすり筆をそめ被進。頼経これを取りて習はし

め玉へり。手本は長生殿の詩也。事をはりて義時に御劔を賜へりと東鑑に出でたる也⁴⁰⁾。

源実朝だ若冠の間、評定執権の輩、奉行として昵近伺候のものの中に、芸能ある輩を撰んで弓の学問所の結審をなさしめ、各々当番の日は学問所を不去参候して、時の御要を可承と命じぬと也⁴¹⁾。

北条時頼が將軍頼嗣に『貞観政要』を献上した段は、

時頼貞観政要を一部かかしめ、……將軍家に奉り、文武の御稽古あるべきことを諷諫し奉り、和漢御学問のためには、縫殿頭・参河前司をすすめ申し、弓馬の御師には秋田城介・小山出羽前司を執し申さる⁴²⁾。

と記され、その意味などにも触れている。金沢文庫については次のようにある。

金沢実時は天性文書を好む。貞顕、清原教隆に群書治要を講ぜしむ。而して実時金沢に文庫を立て、金沢文庫の四字を印にきざみて、仏書には朱印儒書には黒印を押す。後世其の遺書のもれのこりてあるなり⁴³⁾。

室町時代に関しては、前記した所では義満の時までを評していた。以降については、義尚が「文学を好み倭歌を詠じ尤も弓馬の芸を試み玉ふ」たが、武将の器にあらず学問が意味をなさなかったと記している⁴⁴⁾。他、今川了俊について「了俊の息仲秋への戒の書は、俗に今川状と號して児童も是れを取りあつかへり」があり⁴⁵⁾、東常縁、宗祇の古今伝授に触れられ⁴⁶⁾、上杉憲実が「此の人足利の学校に五経正義を寄進せり」と記され⁴⁷⁾、太田道灌が「五山の名僧を請じて詩をつくらしむ。文庫を立て万巻の書をあつめ、医方・兵書・史伝及び歌書残る所なし」⁴⁸⁾と述べられる。

戦国武将の行状記にも相当した記述はある。ここで列举する事は避けるが、それは例えば、織田信長が幼少時に手習い読書を嫌って武芸に執した話や、秀吉が名護屋の旅館に学文所を立てた等という話で、学問事情を表している⁴⁹⁾。素行の著作には兵書としての性格上、武将の行状記が豊富に所載されており、学問の意義論の検討のために、そこより例証として類似の記事を多く引いているのが目につく⁵⁰⁾。以上が、素行の学問史論の素材である。

素行の学問史観は、一つには政教一致の視点に立って、治政の実態がそれを支える教学の良悪是非に関わっていかなる様相を呈するに至ったかを評価するところにある。為政者の学問が、どれだけ素行の考えている「聖学」の意義に近く、治政上に効力を発揮出来るかを評価するという点で一貫している。彼の主張するところは自身の「聖学」の必要性である。

今一つは、日本風俗の学事面での評価にある。それは日本を「武俗」としてその

「武徳」による治政を評価する半面で、「文俗」もまた日本独自のものとして評価出来るという意見である⁵¹⁾。儒学伝来に関する前記の引用にもそれは表明されていたと見るべきだが、次のような記述が指摘出来る。

文才は外の用にして実義にあらず、本朝は本朝の言語文字にして事たらずと云ふことなし。上古聖神教示の道、中古武將の制法、多くは異朝の聖人立て玉ふ処ののりに無不応、歌曲感鬼神、風俗催馬楽天下の風俗を正し、祭礼は天地宗廟を本とす。況や忠臣義士、文才博学の類不可枚挙、倭漢相通ずるの後は漢の文才をうつして我が国の才とすること又大なる道也。阿部仲満は盛唐詩人李白・王維に交はり其の才を称せられ、唐朝に事へ北海郡開国公に封ぜられると云々。しかれば彼の国の文才、習字にたやすかるべし。されば中古に及んで詩作文章又異朝におとるべきにあらず。これ皆習俗によること也⁵²⁾。

素行の学問史の把握には、客観的な部面と主観的に論を進めようとする部面が確められた。記述の中には無論現在の教育史学上、その誤りを指摘できるもの、不確かなものが見出せるが、客観的記述を努めて意図している事も窺われる。教育観として史的な論拠を内容とするに至り、客観性を高めようする趣旨を看取出来るのである。

(結)

本稿では、素行の学問史論が学問史学史の上で、近世前期の特色を明確に現わしながら、素行の教育・学問観の基礎論として如何に関わっていたかを明らかにしてきた。

基本的には学問復興の基盤を古代の理想ないし伝統文化の源を探求する中でとらえ、中世以降に長期の学問衰退を招いたと認識し、当代において新生・復興を唱えるという歴史意識に立っている⁵³⁾。この点で素行においても大学寮の評価が基本的な記述として位置する事由が認められるが、素行の場合は古代の理想観を拡大的に解釈し、一方、中世武家での学問事情を尚各所に拾いながら、儒学の復興という一般的意識に加え、新たな「武教」へと発想を結ばせる試みへと向かっているのである。学校設立、或いは教育方法・内容に亘る実学の提供を説く素行の場合は、復興論の趣旨にとどまらず、明確に自説の「聖学」に制度・方法論を用意しているため、こうした趣旨を可能にしている。

本稿は、ある面では教育史学史にも関わるが、近世学問史学の歴史学的評価については尚研究が要求され、通史的に概観し個々の思想史的位置を考える上でも大幅な資料の補完が求められることはいうまでもない。ここでは素行の学問史論の比較考察のために援用した。素行の学問史観についての同様の史学的な評価は尚詳細にまた総

合的に検討の必要を感じている。

〔註〕

- 1) 掲出論文・(工学院大学研究論叢 28・1990)
- 2) 教育史学史の領域と考えられるが、ここでは「学問史」の用語を使う。
- 3) 加藤勝也「日本教育史学の発祥」(『教育の史的展開』・1952)。加藤仁平『日本教育史』(師範大学講座5・1926) p. 293。石川謙「江戸時代までの学校に関する史的研究方法の発達」(『日本学校史の研究』・1960・序論に所収)に、熊沢蕃山、荻生徂徠、三輪執斎、荷田春満、中井竹山、正司碩溪、西島柳谷、近藤正斎の説をあげて、「論者が学校の在るべき姿を論じるにあたって、つごうのよい面から光をあてて「史」をえがいている点と、幕末期になってやっと考証学的な立場から研究するようになった点」の指摘がある。
- 4) 高柳光寿「近世初期に於ける史学の展開」(『本邦史学史論叢』下・1939)
- 5) 伊東多三郎「江戸時代後期の歴史思想」(『日本における歴史思想の展開』・1965 p. 218)
- 6) 大久保利謙「近世における歴史教育」(『本邦史学史論叢』下)
- 7) 国民精神文化研究所編『藤原惺窩集』上・1938, p. 138
- 8) 柴田実「江戸時代の修史事業」(『本邦史学史論叢』下)。註9書。
- 9) 国書刊行会編『本朝通鑑』首巻 p. 9
- 10) 年譜・広瀬豊編『山鹿素行全集』15, p. 118。小沢栄一『近世史学思想史研究』・1974, pp. 288~301 参照。
- 11) 山鹿語類・(前掲) 4, pp. 30~33。野間三竹、水戸光圀らが鷲峰に対して倫理観に立つ史論を要求し批判したが、幕府の公的な修史事業を理由にそれを退け、史論を伴う著作は別個に著わしたとされ、学問史論形成の欲求を窺わせる(池田雪雄「近世史学の倫理性 (一)」・歴史 17-11・1942)。
- 12) 『山崎闇斎』(日本教育思想大系) p. 4
- 13) 『中江藤樹・熊沢蕃山集』p. 354, 374。山鹿語類・(前掲) 4, pp. 30~33。
- 14) 学問史的な論及という点については、素行は中江藤樹、蕃山、闇斎とその統を継ぐ浅見綱斎、また貝原益軒、荻生徂徠らの記述と比較しても豊富な論述が見て取れる。蕃山の古代教育史論、また「我朝王代の学校の躰はしり待らず」として後の学校必要論などもあるが、素行の学問史記述は量的にも圧倒している観がある。『蕃山全集』2, p. 162。『近世史学思想史研究』(前掲) p. 341, 289, 297, 300。久保田収「浅見綱斎の史学思想」(芸林 4-6) 1954。
- 15) 加藤仁平「山鹿素行に於ける日本教学の淵源 1-2」(教育学研究 2-12) 1934。『蕃山全集』2, pp. 279~92
- 16) 『益軒全集』3, pp. 254~55 pp. 641~2, 646。
- 17) 『山鹿素行全集』(前掲) 13, pp. 52~67
- 18) 『近世史学思想史研究』(前掲) p. 306
- 19) 『日本教育史資料』8, pp. 23~4
- 20) 古田良一「史学者としての松下見林」(芸文 12-1) 1921
- 21) 学原(慶応義塾大学図書館蔵) 1丁裏 ~3 表
- 22) 同前・2丁表
- 23) 『続々群書類従』10, pp. 480~549。『国書解題』上・p. 62。小林健三「近世における日本書紀の研究」(『本邦史学史論叢』下)。

- 24) 滝本誠一編『日本経済大典』10, pp. 280, 295~7, 303~5。古田良一「伊藤東涯の史学説」(文化 2-2) 1934。「古今教法沿革図」(天理大学図書館蔵) など中国教育思想史についても図を付記しているのが特色である。
- 25) 『続々群書類従』10, pp. 552~6
- 26) 『松宮観山集』2, pp. 1~36。拙稿「松宮観山の教育観—武教主義を中心とする考察—」(関東教育学会紀要 12) 1985 参照。『日本経済叢書』16, p. 351。『日本文庫』6, p. 1
- 27) 『日本文庫』6, p. 1~63
- 28) 後期には学校運営の建策中に学問史に触れるものも多い。脇蘭室の「学校私説」(『脇蘭室全集』p. 20) にも通史的記述が見られる。事例として上げたが、「上世の儀は詳に相記候書無之、神武天皇以来は史伝も慥に相見候へば、定て此時世には粗文字も相伝り候儀と覚申候。応神仁徳の御時より經典渡り学事起り、漸に文教相行れ、近江の朝に庠序を設させられ…」としており、近世に入つての諸儒の活動、修史、幕府、各藩の学校についても述べている(『脇蘭室全集』p. 20)。
- 29) 『近藤正斎全集』3, pp. 10~91, 260~77, 418
- 30) 『続々群書類従』10, pp. 558~684。渡辺盛衛『伊地知季安先生事蹟』・1934, pp. 1~12, 31, 65。佐藤一斎に「桂庵碑文」の撰文を依頼するために本書を送っている。
- 31) 『水戸学大系』8, pp. 148~162。「射史」「酒史」などの主題別の論考が在る。
- 32) 素行の教育論とその歴史記述については、例えば、「素行の教育目的論は史的研究より省察して体得することを説くものであった」のような指摘がある(勝田勝年『日本教育思想史』・1940, p. 306)。山鹿語類・広瀬豊編『山鹿素行全集』4, pp. 30~3。出典は『日本書紀』『続日本紀』『令義解』『東鑑』『神皇正統記』が主である。
- 33) 山鹿語類・(前掲) 4, pp. 203~227
- 34) 同前・pp. 223
- 35) この二書に関しては既に加藤仁平「山鹿素行に於ける日本教学の淵源 1-2」(教育学研究 2-12)、「山鹿素行の武士道教育論」(同前 3-5) 1935, に「素行の古代教育史論として評価出来、それは教育精神史の見地に立っている」「鎌倉教育史観に基づいている……」「素行は日本教育史家として特筆されるべきである。」と評価されている。『中朝事実』は教学論から歴史をとらえる主観性が強く、教育史の客観的記述という点からは現代的意義を欠かざるをえない。
- 36) 羽溪四朗「山鹿素行の歴史観」(史窓 17, 18) 1960。『近世史学思想史研究』(前掲) p. 306 参照。
- 37) 謫居童問・『山鹿素行全集』(前掲) 12, pp. 286~8
- 38) 武家事紀・中・同前 13, p. 399。『武家事紀』中, 44 巻, 48 巻が、「山鹿素行の武士道教育論」(前掲) に取り上げられている。尚「順徳院御記」は『禁秘抄』を指している。
- 39) 掇話(寛文4年)・同前 11, p. 519
- 40) 山鹿語類・同前 8, p. 525
- 41) 同前, p. 519
- 42) 武家事紀・同前 13, p. 428
- 43) 山鹿語類・同前 7, p. 327
- 44) 武家事紀・同前 13, p. 448, 494
- 45) 山鹿語類・同前 7, p. 337

- 46) 同前, p. 332
- 47) 同前。
- 48) 同前, p. 336
- 49) 同前, 261, 348。この類例は多いが、これは実学に立つ教養主義への批判を主旨とする学問史観と言える。
- 50) 今川氏真(同前 8, p. 159), 北条泰時(同前 8, pp. 432~3)について、家訓(同前 7, p. 181)など類例は多い。
- 51) 学事については文字言語についても触れられる(同前 8, p. 402 他)。
- 52) 謫居童問・同前12, pp. 334~5
- 53) 古代の理想観, 中世以降の衰退観, 当代の新生観の三段階によって歴史像を構成する歴史意識における三時観を基礎とする(註2論文 p. 227 参照)。

(うちやま むねあき 本学講師 教職)